第６回　丹波篠山市の産科充実に向けての検討会　会議録

日　　時　令和元年１２月１２日（土）１９：００～２１：００
場　　所　丹南健康福祉センター２階第一会議室
出席委員　酒井隆明、平野斉、芦田定、小嶋敏誠、西潟弘、太田鈴子、畑弘恵、
　　松本正義、深田和泉、高瀬晶子、稲川なをみ、土性里花、成瀬郁、
　　加古佳与子、田村博子、岩田瑞希、中嶋唯、稲川沙弥佳
顧　　問　小西隆紀
兵 庫 県　元佐龍
欠席委員　西田直美、谷岡春南
事 務 局　横山実、山下好子、吉田久仁子、堂東美穂、小西雅美、仁木秀樹

会議資料・資料１　レジメ
　　・資料２　今後の産科・分娩の在り方
　　①お産応援１１９
　　②丹波篠山市立バースセンター
　　・資料３　高石市立母子健康センター（パンフレット）
　　丹波篠山市妊婦救急搬送事業「お産応援１１９」運用要綱（案）
　　お産応援１１９イメージ図

高石市立母子健康センター　視察研修報告
（事務局）
　堂東係長説明
　去る１２月１２日の木曜日に検討会委員１４名、事務局６名で高石市母子健康センターの視察研修を行いましたので、そのご報告をいたします。
　お手元に資料をおいております。要点のみの説明になりますがよろしくお願いします。

①母子健康センターの施設、運営の概要
　昭和３８年、高石市東羽衣地区に助産を主に母子の健康増進を図る施設として設置され、市が直営で運営されていました。平成１５年には高石市立診療センター建設に合わせて再度施設の整備がなされ、現在市の指定管理で一般財団高石市保健医療センターが母子健康センターを管理、運営しています。
　全国で二か所しかない公設の助産所で、開設者は高石市長、管理者は財団職員の助産師となっている。
　母子健康センターは町立助産所からの長い歴史があり、今では市内で唯一の分娩施設となっていますが、説明によりますと、少子化や産科医不足が進む中で助産所を存続でき

た理由として、市の方針、助産師の確保やモチベーションの維持、産婦人科医の協力、協力医療機関の確保、バックアップ体制の充実、大阪府の産婦人科、新生児相互援助システムとの連携等をあげられておられました。

②センターの特色

パンフレットをご覧ください。

母子健康センターは病院ではなく、助産所です。

妊娠から、産前、産後、新生児まで助産師が診断、診察等を行っています。

助産師は常勤４名、非常勤８名、年齢は３０～６０代、ほとんどの助産師がアドバンス助産師の認定を持っている。

視察研修では、３名の助産師が出席くださいましたが、どなたも笑顔で生き生きと対応してくださったのが本当に印象的で感動したところです。

センターでは年間の分娩件数が１１４件（Ｈ３０）、医療機関ほど多くないので、１人１人のお産にゆったりと大事に関わることができています。また妊娠中からバースプランを一緒に話し合って、助産師さんと妊婦さんの信頼関係が深く、妊婦さんがきちんと自分の健康管理を行い分娩に至ることができており、助産師さん主導で本来の女性の産む力を導きだし、赤ちゃんの生まれる力と合わせて、とても温かい家庭的なお産をされていると感じました。

分娩室も一般的に想像するお部屋ではなく、分娩台そのものもフラットで照明や壁面も優しくリラックスできるような工夫が随時にされていました。

誰でも立ち会えるお産をされているので、家族が希望すれば子どもさんでもお産に立ち会うことができ、子どもにとっても命の大切さや尊厳といった部分も育まれると感じました。他に、病室や診察室、食堂等すべて見学させていただきましたが、どこも家庭的な雰囲気があり、母親目線でとても落ちつける施設でした。

母子健康センターでお産をされる方は、歴史的な背景も関係してか、親子二代助産所で出産された場合や経産婦が多いのが特徴でした。

先ほどの分娩件数１１４件の内訳でみても、第２子、第３子が６割になります。

随時、母子健康センターは妊婦さんの事前見学や相談、また産後の体重測定などいつでも気軽に足を運べるよう声かけをされているようでした。

助産師さんに、母子健康センターがお母さんに選ばれている理由を尋ねてみますと、

①ほとんどが口コミ、自分らしいお産をしたいという思いで来られる。
　評判や家族、知人からの紹介

②妊婦と助産師の距離が近い、自然分娩、家族がいつでも立ち会える

③土、日もやっている。

④分娩費用が安く、健診費用も公費でいける。

②医療機関との協力、バックアップ体制

母子健康センターでは、妊娠２０週から産科医療機関の紹介や所産所での出産を希望する妊婦を受け入れますが、市立堺病院等と提携されており、産科医による健診が必要になっています。高石市は立地的にみても、協力医療機関や二次医療機関への移動時間が概ね３０分以内にあり距離が近く恵まれているところですが、助産師さんに伺うとやはり、正常分娩を行うにあたっては医療機関、特に産婦人科医との日頃からの信頼関係がベースになるのでとても大事に考えておられることが分かりました。

助産師による診察で異常が見つかれば、速やかに近隣の産科医療機関へ紹介をされています。経産婦さんが多いので、早産になる方もあり、救急搬送が必要な場合は、助産師が同乗して搬送しているそうです。助産所で扱えるお産は正常妊婦、正常分娩のみなので、協力医療機関との連携をとても大事に考えておられ、妊婦さんに寄り添いながらも、早め早めに適切に対応し事故なく行うことを念頭にされています。

二次医療への流れや異常時の対応については、詳しく資料にまとめてありますので、ご覧いただきたいと思いますが、緊急搬送について伺うと、本当に件数としては少なく、直近一年で１件だと言うことです。

今回の視察研修を行うにあたりましては、高石市の職員や母子健康センター職員など多くの係者の皆さまが準備をして頂き、当日も親切、丁寧に対応いただいて、実のある視察になったと感じています。

参加して頂いた委員の皆様の感想なども聞かせて頂きたいと思います。

高石市の母子健康センターは市民にとっても、助産師にとっても安心して妊娠から分娩、子育てまで切れ目なくサポートしている施設です。そこで働く助産師も、病院では自分がしたい助産ができなかったけれど、ここでは多くの仲間と一緒にお母さんにゆっくりと寄り添い、自分自身が生き生きと働ける場所で、生きがいを感じていますと話して下さったのが心に残っています。

以上で、高石市母子健康センターの視察報告を終わります。

検討事項

（１）今後の産科・分娩のあり方について

山下次長　説明・・・・・・・・・・・・・・・・資料２，３参照

（消防本部）

当初、消防本部に「マタニティーサポートカー」の相談があったが、一番丹波篠山市に合った事業を考え、先ほどの説明に至った。

「マタニティーサポートカー」は妊婦の分娩に特化して注目はされているが、救急業務の中では救急の妊婦等は搬送できるとしている。市民の中には分娩は病気でないので、救急

車を緊急でお願いすることにためらいがあると思うが、それを取り除いていただき、そうではないと言うことを伝えたい。登録制度にしたのは、消防が事前に妊婦の情報を持っておくことでより迅速、的確な対応ができる。
急に分娩が始まったと仮定すると、高規格救急車には本来「お産セット」が積んであり、比較的広い車内でお産に対する対応、分娩後の新生児に対する対応も可能である。

（顧問）
高規格救急車は現在、何台あるのか

（消防本部）
現在４台全ての高規格救急車で先ほどの対応ができる。また救命救急士も緊急の対応、措置ができるよう研修を受けているので安心して頂きたい。

（委員長）
救急車を新たに購入するのでなく、現在の体制で運用できる。
他に何か、質問はありませんか。

（顧問）
今度入る救急車で５台になる予定なのか

（消防本部）
先ほど４台と申し上げたが、実質は予備車が１台あり、新しく更新すれば予備車と合わせて合計で５台になる。

（委員長）
里帰り出産を市内で迎える妊婦の出産場所が丹波医療センターや三田市民であっても対象となるのか。

（事務局）
そのとおり、対象となる。

（委員）
病院への登録はするのか。

（事務局）
病院の登録は、必要ない。救急隊が、病院に向かう時必ず、行き先の病院へ連絡を入れて

いる。要綱の第５条に利用条件を３つ入れている。

（委員）
自分で行けないということなら、呼んでもいいということですね。緊急の時でなくても利用できるということか。

（消防本部）
自分で病院に行けないということであれば、連絡してもらったらよい。

（顧問）
高規格救急車というと、特別な設備のあるものという気がしていたが、今ある救急車でできるということで、自分とこで病院へ行けないと思えば、今現在も救急車を呼んでもよいということか。これをわざわざする特別なことは何か。

（委員長）
何よりもきちんと知らせて取り組むことが必要である。

（委員）
病院にも、救急でなく道路が凍って救急車で来たと言うことを、知らせておかないと病院も驚くと思う。

（委員長）
もちろんこの制度が動き出すと、該当する病院へは周知していく。

（委員）
妊婦さんは必ず入院前に今の様子を連絡して入院されるので、車で行くかタクシーか救急車で行くかということを伝えてもらえればトラブルなく受け入れられる。

（委員）
基本、救急車が動くと救急隊から病院へも連絡が行くようになっているのか。

（消防本部）
救急隊から病院へは必ず連絡している。

（委員）
母子手帳発行時に登録となっているが、登録していなくても利用はできるということか。

（消防本部）
登録が無くても利用可能である。

（委員）
救急車で行けると言うことだが、上の子どもがいても一緒に乗せて病院まで行くこと可能か。

（消防本部）
できるだけ融通きかせる。救急車によって定員があるので、その範囲の人数は乗ること可能である。

（委員）
新しい車を購入等の話しが前回あったが、それは必要ないということか。それと、職員は現状で対応するのか。

（消防本部）
新しい車の購入はなしで、職員も現状のままで対応する。

（顧問）
第５条の自力で受診が困難な場合ということを判断するのは本人であるから、電話したら必ず救急車が行くということか。救急車と同じということなるのか。

（委員）
利用にあたって何か番号とか証明するものがあるのか。

（事務局）
様式第２号で、登録確認証を添付している。登録番号をつけ発行し、消防本部と連携する。

（委員）
救急車をタクシー代わりに利用するなどのないようにと言われているが、タクシー代わりの利用はいけないということか。

（消防本部）
タクシー代わりの利用はやめていただきたい。タクシー代わりに利用される方は、救急性が低いため、そのために重篤な方が利用できないということがないようにしていかなければならないので、タクシー代わりの利用はやめていただきたい。

（委員）
その辺りは、一線入れておかないといけない。

（委員）
陣痛が起こって救急車で行ったが、前駆陣痛で家に帰っていいということも診察後にある場合がある。救急車で行かれる方は、行きのみで帰りは自分で何とかしないといけないということもあることを理解しておかないといけないと思う。

（顧問）
この事業は、安心してもらうための事業か。
今の現状で、救急車の運用規定もあるはずで、今も陣痛が来て救急車を希望すれば利用できるのか。

（消防本部）
基本的には、タクシーで行けるならタクシーで行っていただきたい。

（委員長）
方向性としては、これでいかせていただく。来年の４月からの運用に向け取り組んでいく。名称については、次回の検討会までに夢のある名前を考えていただきたい。電話、FAX でも案の提出をお願いしたい。

（顧問）
今は、タクシーを優先しているがこの事業により救急車の利用が可能ということでそこの違いはあるのかを確認したい。

（消防本部）
違いはない。
何が違うのかは、事前登録があるということになる。事前に情報をもらっていると出動するまでがスムーズで、時間短縮ができることに大きなメリットがある。

（委員）
救急車の見た目は何もかわらないということか。ピンク色にしたり、見た目でお産だとわかるようにできないのか。

（消防本部）

それは、できない。

（副委員長）
若葉マークを付けるみたいにお産の方を運んでいるというマークを救急車につけるなど、検討をお願いしたい。

（委員）
見た目よりも宣伝周知みたいなための工夫はないのか。

（副委員長）
周知の方は、市の方で広報等を頑張ってもらいたい。

（委員長）
PR も大事なことなので、何か案があれば出してください。
それでは、もう１回名称と PR の案があれば次回までに連絡してください。

（委員）
女性の消防隊員は何名か？

（消防本部）
２名である。

（委員）
女性の隊員を増やしていくこともお願いしたい。

（副委員長）
検討事項②丹波篠山市立バースセンターについて事務局から説明をお願いしたい。

（事務局）
丹波篠山市立バースセンター（案）について説明（資料）
正常分娩のみを取扱い、医師との連携をとったものを考えている

（委員）
この会が始まったのは、ささやま医療センターが分娩できないということで、妊婦さんが困ってしまうということであった。それでは、何で困ってしまうのかですが、妊婦さんは

丹波篠山市で産みたいのか、病院が遠方になり受診するまでに何かトラブルが起こらないか不安などがある。そのような目的をはっきりさせることが必要。１番は、安全に分娩することへの不安が多いと思う中で、バースセンターは正常分娩のみで合併症のある場合は、医療機関になる。高石市の場合は、自分らしいお産をと希望される方が多いと聞いた。
まず第１に安全に分娩できるかを考えた上での話ではないか。

（副委員長）
目的の把握である。医師との連携のもとにということで、医療機関との連携はどのように考えているのか。

（事務局）
高石市の場合も、２０週までは医師の診察で、産婦人科医との連携なしでは考えられない。医師の診断を基に助産師さんが取り上げるということになる。
丹波篠山市では、多様なお産スタイルを選べる状態ではないが、いろいろな選択肢があって妊婦さんが選べることも必要ではないかた考えている。

（委員）
選ばれる方が多かったら良いと考える。
公的な資金を使ってなので、利用する人がいないといけないと考える。

（委員）
リスクが心配。正常分娩だけ扱うというが、正常だと思っているときに事故が起こると思う。8 人の助産師が確保できるか、管理者も常に考えていないといけない。それと、市民が本当にそれだけ望んでいるのか。
市民にアンケート（市場調査）を取ってから始めるべき、選ぶ人が多いならよいが、公的資金を入れてするものなのか。

（委員）
最初に市民にアンケートとったが、そこから変わってきているので、アンケートは必要と思う。リスクに関しては、オープンシステムを活用したお産も含めることで安心は確保できると考えている。高石市のシステムは、その点もしっかりとされていた。また、妊婦健診に 1 時間かけている。継続したお産ケアがしっかりとシステムされていれば、安全確保ができる。助産師業務ガイドラインがしっかりと決められており、それに沿って、早めの搬送・医師相談を行っていくことでそういった安全も確保できている。

（委員）

高石市の視察、はじめは疑問だったが、とてもよかった。こういったところで産みたいと思った。そこの助産師が何度も言っていたのは、「ここ（助産所）で出産したいなら、妊婦さん自身が健康管理をしっかりしていかないといけない。」リスクの高い出産にならないように、妊婦自身の意識を高めている。

（委員）
実施するとすれば、医療センターを使ってはどうか。子育て中のお母さん方に聞くと、正常であっても医師にいてほしいという方が多い。高石市も全出産の 10%程度。本市に必要なのかと思う。

（事務局）
この案を実施するということではない。ニーズ調査等は必要であると考えている。市民の声が一番大事。

（副委員長）
アンケートの時期は？

（委員長）
助産師のみでの出産の事を理解していくと、そういったことも選択肢の一つとして考えていくべきと思った。お産応援救急車だけでは、市民は納得しないと思う。これだけで子育てが充実しているとは言えない。分娩の前までは、しっかり市内で見てもらい、出産はオープンシステムや助産所等の選択肢を検討していきたいと考えている。

（顧問）
安全と安心。安全はしっかり作っていかないといけない。丹波圏域である程度できるような状況にする事は、われわれの仕事。そのうえで安心については、助産師さんが言われるようにそれぞれの部分がある。それを調整していく事がバースセンターでできるという。まちづくりの部分まで含めると。本市として何を売りにしていくのか。選ばれるために、どこまでしていくのか。安全のイメージと安心を守るということは、分けてしっかりと議論していく事が必要。一緒くたにしてしまわないことが重要。

（委員）
高石市は、助産師や母子センターを守る大阪府のシステムがあった。これがあるからこそ、助産師も安心して行えるのだと思う。そのバックアップが本市でできるのか。国が医師不足もあって助産師中心のお産を進めている方向へシフトしていこうとしている動きもある。母子センターのような施設は、女性としては、2・3 人目となれば、近くにこういった

施設があれば選択していくだろうと思う。

（委員）
産科医が今後増えるとは思えない。新しい取り組みも必要と考える。今検討していることは先行投資。アンケートをとるなら、若い世代中心にしてほしい。バースセンターは、出産だけでなく産前産後のフォローで産後うつや虐待防止などにつながっている。

（委員）
バースセンター反対とか、安全でないと言っているわけではない。本当にニーズがあるのならしなくてはいけないこと。他の医療機関との競合や連携を考えていかないといけない。それでないと話はすすめられない。この検討にも産科医が入っていないのはおかしい。入ってもらった方がよい。

（事務局）
方向性が決まってから入ってもらおうと考えている。

（顧問）
決まってから入ってもらったのでは、これまでの積み上げがない。話合いの時から入ってもらった方がよい

（県職員）
高石市に視察に行った委員の皆さんは肯定的な感じであるが、今回の提案は、バースセンターの総論的案であって、丹波篠山市の案ではない。できれば、次回以降、もう少し中身を詰めた具体的な提案が必要。この委員会では、おおむねバースセンターはあったらいいよねといった意見だったと思う。あとは、市としてどうしていくかを詰めていくだけ。

（委員長）
今日皆さんの意見を聞いたうえで、具体的な内容に進めていくつもり。

（委員）
お産経験がないので、イメージも付きにくいが、こういった選択肢が増えるのは嬉しい。

（委員）
高石市を視察して、もう一人産めるのならここで産みたいと思うほどよいところだが、本市でできるのか。受入の病院だけでも大きな課題である。市内の方で市外の助産院を選ん

でいる方もある。そういった実態も調べられるのなら知りたい。

（委員）
医療センターでも、分娩時に見ているのは助産師。妊娠中は医師がしっかり見ている。NICU受け入れできるのか。三田市民病院と済生会の統合の事。忙しい病院では、十分な指導・フォローができていない。しっかり助産師がフォローできていないときに事故が起こる。母子センターという大きなものを作るのではなく、しっかりとバックアップ体制を整えて、実績を積み上げていく事が必要。退院後にしっかりと子育てできるようなフォローができるように。

（委員）
助産師は、病院勤務では力を発揮できない。助産師としてかかわれていない。しかし、バックに医師がいないと安心がない。助産師と医師との信頼関係は重要。バースセンターにかかわる医師は欠かせない。産科医不足の流れから、助産師の能力向上が進められた。市の魅力として力のある助産師に集まってもらわないといけない。

（委員）
高石市には行っていない。「安全」をどう作るのか。妊婦にとっての安心な場所は作れると思うので、妊婦をサポートするサポートセンターから始めてはどうか。

（委員）
高石市はいろいろな条件がそろっている。すべてがうまくいくように整っている。本市であるなら、もっと小さな規模でもよい。まず、体制を整えていく事が必要。理想としてはよいと思うが…。助産師の熱意によって支えられているようだった。そういった人材が集まるのかどうか…。

（委員）
高石市の視察で感じたのは、行政、医療関係の連携が非常にスムーズであった。これがなければできない。子育て・出産したいまちへの投資はあってもよいと思う。それは、婚活から始まるような相談センターであってもよいと思う。丹波圏域の周産期センターは、早く何とかしてほしい。それが一番の安心・安全だと思う。

（委員）
バースセンターに反対している訳ではなく、ニーズがあれば市の負担があってもよいと考えている。ただ、医療機関が競合しあったり、互いに圧迫することがないように配慮をし

ていただきたい。また、安全してバースセンターを運営していくためにも市内の産科医との連携を密にしていく必要があるため、この会議にも産科医がいないのはおかしいと思うし、体制を考える必要がある。

（副委員長）
委員の言われるとおり、以前からこの会議に産婦人科医がいないのはどうかというご意見はいただいている。

（委員長）
専門の先生との話合いも検討していきたい。

（顧問）
決まってから協力してほしいというのではなく、立ち上げの段階から参加してもらっていたほうがよいと思う。

（県職員）
今日の議論で、「お産応援の１１９」については、前回のサポートカーの話があって市役所の中で消防本部としっかりと議論して、現実に可能かどうかを検討されている。バースセンターについても、高石市に視察に行かれて、参加された委員の過半数以上の方はよかったと考えておられると思うが、事務局からの資料では、高石市のバースセンターの概案としては書かれているが、丹波篠山市立バースセンターの案ではない。資料にあるかかりつけ医は、どこの医療機関で、どのようにするのかがわからない。できれば、今後、もう少し具体的に協力医療機関はどこだということ等を議論すべきだと考える。
バースセンターについては、あればよいというのは、この検討会の意見であると思われるので、次は具体的に検討していけばよいと思う。

（委員長）
今日までのところは、まだ具体的にどこの病院と、どこの先生と連携できるかということや、実際にオープンシステムでどこの病院と連携するか等、今日の議論を踏まえて詰めていきたいと考えている。これから詰めていくためにもある程度の方向性を出していかないといけないため皆さんのご意見をいただいている。
皆さんからいただいた意見の中で、医師会の先生からは安全ということを第一に考えられておられるということは理解している。また、顧問がおっしゃられたように、丹波篠山のまちづくりや丹波篠山の子育てという観点から考えた場合、何かしらここまではがんばってやります、というものを示したい。
それが、バースデンターの中でオープンシステムや産後ケア等を実施できればよいが、具

体的にどうするかは次の話になる。実際に話をしていく中で難しいかもしれないが、今日は皆さんの意見をお聞きしたい。

（委員）
お産経験はないが、いざ、お産をするとなると真剣に考えると思う。
検討会の中で意見があったようなバースセンターがあれば選択しが増えてよいと考える。

（委員）
高石市の母子保健センターはとてもよいところだとわかった。
しかし、いざ丹波篠山市で同じようなものを建てるとなれば、先ほども先生からご意見があったように受け入れ態勢の病院をどのようにするのかということだけでも大きな課題だと考える。また、３人の子どもがいる知人がいるが、わざわざ神戸市の助産院出産された方がいるので、その理由が知りたい。ただ、助産師が長い目で一人の妊婦さんと関わりを持って、産後も産後うつや虐待もケアできるバースセンターはすばらしいと思う。

（委員）
病院では、入院してから分娩までを診ているのは助産師である。先生は、妊娠期間中、しっかりと妊婦さんを診ていただいており、診断技術の向上や検査、エコー技術なども発達しておりリスクを回避することができる。出産後の入院についても助産師がケアをしている。
病院の集約化について、三田市民病院と済生会が統合すれば、診察までの待ち時間が長くなり、不安である。丹波篠山市の場合、医療センターに新生児を運ぶことができないため、ＮＩＣＵのある済生会等に搬送することになるが、本当に受け入れていただける体制がとれるのか不安に思う。丹波地域が空洞化しているのではないかと思ってしまう。
高石市の助産師はエコーも診ることができるということだったので助産師の技術が高いと感じた。また、病院との連携についてもバックアップ体制がしっかりと構築されており、大阪はすごく恵まれており、安心して助産師も働くことができると感じた。篠山では、医療センターやタマル産婦人科とどこまでの連携が取れるのかということや搬送するときの基準や相手の受け入れ体制の確保などの課題がある。バースセンターの案は５床ということだったが、能勢町では小さな助産所があり流行っており、丹波篠山も小さな助産所から始めて実績を積んでから大きくしてもいいと考える。
神戸の北区のクリニックでは、いっぱいで４日間しか入院することができないところもあり、翌日に外来で診てもらうというところもあり、しんどい状態で通院することになる。
出産後の育児についても、わからないまま退院ということになるので、丹波篠山は産後もケアをしている施設があるというのはよいと考える。

（委員）
助産師が助産師として、お母さんに関わることができるのはバースセンターだと思う。助産師は、妊娠中から産後までをケアできるので、すごいことである。
助産師が、ある一定のところまでは診て、異常があれば頼れる先生がいるのといないのとでは全く違う。バースセンターを考えていくうえで病院との連携をどのようにとるかということが大切である。案として、バースセンターはすごくいいし、丹波篠山にあればよいと思うが、それまでにそのような病院や医療機関と信頼関係を築いていくのかということが重要である。また、助産師に対しても高い能力が求められるので、そのような能力の高い助産師をどのようにして丹波篠山に来てもらうかということも課題だと考える。

（委員）
産科の問題が生じたのは、医師不足が原因で、安全確保や医師の確保ができないということだったので、まずは、バースセンターではなくて妊婦カフェや相談できる場所から始めればいいのではないかと考える、

（委員）
視察研修に行かせていただいたが、病院のバックアップ体制が整っているし、４名の助産師がすごく連携が取れている。規模的には、大きくなくてもよいので、赤ちゃんを安心して産めるような場所があればよいと考える。
理想としては、バースセンターがよいと考えるが、助産師を集めることが必要となるので、そこも考えていかなければならない。

（委員）
行政と医療機関（バースセンター）の連携が大切だと思う。バースセンターにはお金がかかるが投資する価値はあると考える。将来的には周産期医療センターが丹波地域にあればよいと思う。

（委員長）
提案としてのバースバーズーセンターができれば選択肢が広がる。助産師による出産や他機関と連携したオープンシステム、助産師による産後ケアなどを実施することができる。
おおむね実現できればよいが、どのように産婦人科医や病院と連携していくのか、場所についてはどこで実施するのか、どのように経費をかけずにしていくのか等検討すべきことはあるので、市であったてみるので次回、検討いただきたい。今のところ考えているのが、ささやま医療センターがありますし、これまでからの連携もあるし、中核病院で産婦人科の先生もおられるので、まずは兵庫医大のほうと相談をさせていただきたいと思う。
どうしても難しい場合は、新たに建てるというのは非常に高額になるので、市の場所を検

討したいと考えている。それらを含めて実現に向けての検討を行っていき、報告させていただきたい。

（事務局）
具体的な方向を示して、報告させていただくために、専門部会を設置したいと考えているので、この検討会の中から選出させていただきたい。次回の日程は２月２２日（土）を予定している。

（委員）
バースセンターについて、具体的に考えて協力を依頼するのであれば検討会に産婦人科医を入れるべきではないか。

（委員長）
それも含めて兵庫医大と協議をさせていただく。

（委員）
緊急の分娩であっても医療センターには運べないということになる。

（委員長）
そのとおりである。実際にここで協力いただける産婦人科医と緊急時に協力いただける医療機関は別になると考えている。

（委員）
ララバイプロジェクトのリーフレットが完成したので、紹介させていただく。

【別紙とおり】

（委員長）
これからもよろしくお願いしたい。